東京バッハ合唱団 月報

［第 744 号］2024 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.744
June 2024
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

社会を映し出すバッハ音楽祭

園田 順子（音楽学博士、独ワイマール在住）

👏テューリンゲン・バッハ週間音楽祭に携わって

この 4 月 14 日に閉幕した「テューリンゲン・バッハ週間」音楽祭 2024 年。2021 年からプログラムノートの編集に関わらせていただいて、今年で 4 年目となりました。

「テューリンゲン・バッハ週間」は日本ではそれほど馴染みがないかもしれませんが、こちらでは年々、人気度＆知名度が上昇している、バッハの故郷テューリンゲン州で毎年開催される、比較的大きなバッハ音楽祭です。テューリンゲン州という、移民が他の州に比べると少ない土地柄や、バッハという音楽ジャンルというのもあるのでしょうか、音楽祭チームやその背後にある組織のメンバー自体は全員ドイツ人。ここはドイツですから当然といえば当然のことなのかもしれませんが、よくよく考えてみると、そんなところに、外国人の中でも日本人の私がまぎれ込んでいるのは少し不思議な気もします。その理由は、偶然に私がそこにいたからということの他にはないでしょう。

ただし、19 世紀末にすでにバッハが日本で歌われた記録があることからして、バッハと日本のお付き合い自体は歴史的に見るとそれなりに長い。しかもその付き合い方が特殊ということがあるのでしょうか。日本のバッハ受容に関するドイツ語論文に、日本の学校ではバッハを「音楽の父」と教えているという話がよく出てきますが、このことは確かにドイツ人の眼からみると、興味深い現象だと思います。

話は変わりますが、最近、テューリンゲン州が日本との経済関係を強化するというニュースを読みました。今の時代に日本!? という気もしなくもないですが、今回の音楽祭の中でも、日本とバッハの関係性における新たな幕開けのような息吹きも、微かながら感じ取りました。

というのも、バッハの誕生日（3 月 31 日）プレイベントでは、日本の若手作曲家、梅本佑利さんの作品「スーパー・バッハボーイ」が起用され、梅本さんご本人も現地に駆けつけて下さり、公演が開かれたアイゼナハのバッハハウスは大賑わい。私が記憶している限りでは、このバッハ音楽祭で邦人の作品が鳴り響いたことはこれまでになく、まさに新時代の到来を予感させてくれました。

👏音楽は社会を映す鏡

続くオープニング・コンサートは、音楽が社会を映す鏡というのが如実に表れた公演。

北ドイツにできた若い演奏家グループ Ensemble Reflektor と女性二人（Elina Albach、Holly Hyun Choe）の若手リーダーによって、バッハだけでなく、女性作曲家の作品が取り上げられていました。明らかにダイバーシティーが前面に打ち出された企画です。

（詳細は、もしよろしければこちらもご覧ください→ https://note.com/sonoda_junko/n/nd1e9c1f7dc9a?sub_rt=share_pw）

複雑な現実を敢えて二項対立に単純化して議論するというのは、いかにも伝統的な欧米の哲学思想から来るやり方だと思います。確かに分かりやすくしないと、世の中は変わらないでしょう。とはいえ、現代のサイエンスによると、ジェンダーは男女の 2 つではなく 60 ぐらいあるということなので、二項対立の考え方だけでは今の多様な社会にはそぐわないかもしれません。

そこで、ハイライト公演では、これに加えて、トラ

東京バッハ合唱団 特別演奏会 2024

バッハと仲間の音楽会

①荻窪教会（6 月 8 日）
—満席—

②三崎町教会（6 月 15 日）
—座席に余裕あり—
＜入場無料＞ 14：00 開演

●**キラキラ星変奏曲 Version 2.0**（詞/曲・松尾茂春）
●**ヴァイオリン、フルート、オーボエのための協奏曲** BWV 1064
●**カンタータ第 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》** BWV 6

［独唱］藤原優花(S)、中島麻紀子(A)、野中裕太(T)、及川泰生(B)
［管弦楽］ARS（コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）
［オルガン］田尻明葉 ［指揮］大村恵美子、松尾茂春

※ 6 月 8 日・荻窪教会は、お陰様で予約で一杯になっていますが、両会場とも、直近の状況は事務局までお問い合わせください。（連絡先：本紙タイトル囲み内参照）

月報 2024 年 6 月号 CONTENTS

・「楽譜計画」クラウドファンディング、公開中 p. 3
・〈月報〉を読むたのしみ（大村恵美子）p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［40］（大野博人）p. 4

ンス的な概念（これはジェンダーの話ではなく、メタレベルの意味で）の方向性がさらに示唆されていたと思います。カテゴリーを超えた音楽を作る今話題のニューヨークの女性作曲家、キャロライン・ショウが来独して、1 週間以内にカンタータを書くというもの。その初演作を古楽のエキスパート、ベルギーの声楽アンサンブル Vox Luminis が演奏するというスペシャル企画でした。キャロライン・ショウの初演作は、アメリカのミニマル・ミュージックを構造的土台として、旋律はグレゴリア聖歌っぽく、和声の扱いはちょっとトーン・クラスターのような、でもコードは映画音楽のようなポップス風のサウンド、それにシンプルなドイツ・プロテスタント音楽のコラール書法が混ざっているようにも私には聴こえました。

22 時という遅い時間に開演だったにもかかわらず、たくさんのお客さんが集まり、ドイツの放送局でもこの公演が取材されて話題に（取材 VTR→ https://www.zdf.de/nachrichten/heute-journal-update/bach-h-moll-messe-100.html）。

そして音楽祭の最後は、バッハに立ち戻って、《ロ短調ミサ曲》で。「立ち戻って」と書きましたが、新しいものから過去に戻ったというわけでは決してなく、この選曲はむしろ今の時代の空気を最も映し出したものだったと思います。というのも、音楽祭のプログラム・ノートでも引用させていただきましたが、この作品はバッハ受容史の中で小林義武先生によって「世界平和の訴え」としても解釈されてきたもの。戦争の時代にとりわけ心に沁みるバッハの《ロ短調ミサ曲》で、この主催者としては最後となる特別な今年の音楽祭 2024 年は盛大に幕を閉じました。

（現地の盛り上がり画像などをお届けした音楽祭のまとめ記事があります。こちらもよろしければご覧ください：ブログ記事→ https://note.com/sonoda_junko/n/n477382e7af74?sub_rt=share_pw）

👏日本との接点、もう一つ

こうして、私にとっては、日本の作曲家で始まり、日本の音楽学者のコメントで終わるという、日本との接点を感じる意義深い音楽祭となりましたが、もう一つ、その意味合いを強める出会いがありました。

バッハを地元の人と一緒に歌おうという企画の中で、ある日本人の方が参加していらしたのです。その方、実は昔、なんっと、東京バッハ合唱団に所属されていたとのこと！ このイベントではコラールの作品が課題として出されていたようなのですが、日本語で歌ったことがあって歌詞の意味が大体分かっていたので、ドイツ語でも歌いやすかったと私にお話してくれました。とても不思議な縁です。テューリンゲン州にいながらにして、またもや東京バッハ合唱団とつながりました。

■上図、筆者提供（筆者ブログ→ https://note.com/sonoda_junko/n/n477382e7af74?sub_rt=share_pw

3 月末に日本語歌詞の楽譜がまた新しく出版されたという嬉しいニュース（東京バッハ合唱団「月報」2024 年 3 月号）をいただきましたが、このような大村先生のご活動を通して、日本でバッハに親しむ方たちがさらに今後増えてくることを心より祈っています。

日本語で歌うバッハは、一見すると、バッハの原点から離れているように見えるかもしれませんが、実はバッハについて再考するための深い示唆を与えてくれると私は思います。

ちなみに、来年度 2025 年の「テューリンゲン・バッハ週間」音楽祭は、日本のＧＷにかかる 4 月 11 日～5 月 4 日に開催予定！ということで、日本の方にもよろこんでいただけるような音楽祭特別ツアーを、新しい主催者と相談しながら計画してまいりたいと思っています。

日本にはこれまでバッハ普及に携わってこられた、たくさんの先人の方々がおられます。私もこのような形で、微力ながら、日本とバッハの特殊なつながりの歴史を絶やさずに、ただし今の時代に合ったサスティナブルなやり方で、さらに次世代につなぐこと、そのことに少しでも寄与できるならば大変うれしく思います。

（2024 年 4 月 26 日、ワイマールにて）

筆者・園田順子氏には、「月報」2024 年 2 月号紙上にもエッセー「今の時代に合ったバッハ像とは!?」をお寄せいただきました。併せてお読みいただければ幸いです。月報バックナンバーへは、下欄ＵＲＬからアクセスいただけます。

■クラウドファンディングの公開画面

「日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集」完結計画

クラウドファンディング、公開中

公開 5/15～終了 7/31（77 日間）

日本語版楽譜の完結計画については、たびたびその準備状況などをお伝えしてきましたが、この 5 月、いよいよクラウドファンディング上に公開しました。

■スタート企画は、2 曲の制作支援

・カンタータ第 23 番《主なる神 ダビデの子》

・カンタータ第 34 番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》

全体の構想は、バッハの教会カンタータ全曲に主宰者・大村恵美子の訳詞を付して、残らず出版しようとするもので（既刊 82 曲、新刊 2 曲、未刊 100 曲余）、遠大な計画ですが、手始めは新刊 2 曲の制作費を支援してください、という慎ましい（？）もの。クラウドファンディングへの初めての挑戦です。

ドイツの名門出版社、創業 300 年のブライトコプフ社が、わざわざ「同じデザインの表紙でどうぞ」と言ってくれた、自慢の最新刊です。気合を入れて造本したら思いのほか製作費が嵩んでしまいました。その費用の一部、50 万円を目標に支援していただきたい、というプロジェクトです。寄付額は一口 5000 円、お礼に上記の貴重な楽譜を贈呈（2 冊で定価 4200 円相当）します、という内容です。

■クラウドファンディング画面へのアクセス

プロジェクト画面へのアクセスは、以下のアドレスを入力 https://readyfor.jp/projects/1685-0　あるいは「READYFOR」か「レディーフォー」で検索してください。

上掲画像の表紙から始まり、団の歴史や活動、訳詞楽譜出版の経緯、当プロジェクトの展望などをまとめてみました。ファンドレイジングの成果如何に関わらず、従来とは異なる情報圏の人々の目に触れることになり、観客層の拡大、団員のリクルートなどの効果が期待されます。みなさんのご周辺にも NSN などを通じて拡散していただければ幸いです。

どんなことになるか、読者のみなさんも、パソコンなりスマホなりで、世間の反応をときどき覗いてみてください。公開期間は 7 月末までの 77 日間です。そのうえで、ファンディングの成績が芳しくなさそうな節には、ひとつ強力なご支援を。

＜月報＞を読むたのしみ

大村 恵美子（主宰者）

私自身、東京バッハ合唱団の「月報」に、この 60 年間、ほとんど毎月何か投稿している。そして月報全体を愛読している。

近ごろは社会全体のなりゆきで、合唱練習も週 1 回になっているが、この月報は、私たちのグループの消息を、団員や後援会員、ご常連の読者のみなさんに伝えるもので、知り合いの中学生たちからも、「毎月楽しみに読むのを待っているんだから、やめないで出してよ」と念を押されている。

さて、昨日（5 月 18 日、土曜日）、練習場である荻窪教会で、オーケストラの面々に若い独唱者方も加わって、来る 6 月の特別演奏会「バッハと仲間の音楽会」の演奏陣の初顔合わせリハーサルがあった。

私は、オケやソリストも含めみんなに、声もなごむので「笑顔でね」と念を押していたが、ステージの皆さんも顔をほころばせて、全員が一緒に音を楽しむひとときとなった。

本番での、とくに若いソリスト方やうちの真面目な団員方の表情がどうなるか、両会場での、そんな雰囲気を感じてくださるお客様の投稿（おたより）が、今から待たれる。

どんなに質のよい、りっぱな演奏会でも、優秀さでお客を満足させるというより、歌い奏でるほうも、それを聴きにこられた聴衆の方々も、みんなで音楽を味わうひとときを楽しむ場となってほしい。そして、ああ楽しかった、という感想を、月報からも読みとりたい。そんな仲好しグループとして存続したい。

それが、私たちの「東京バッハ合唱団」が集まっては、次々とバッハの音楽を世におくり出す仕事なのだと思って、成果をたのしみにしている。

「バッハと仲間の音楽会」、概要は冒頭ページに。

■花菖蒲（さいたま市・染谷はなしょうぶ園）
撮影：千葉光雄（団員）2023/06/08

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

＜連載随想＞

退屈するのはいそがしい［40］

ねむたい……

安曇野閑人 **大野 博人**

リクライニング・ソファーによこたわる。スピーカーから野鳥のさえずり。アロマ・ディフューザーからは芳香が漂ってくる。気持ちよく 15 分ほどウトウト。目が覚めてすっきりすると、新鮮な気分でまた仕事を再開。

そんな仮眠ができる部屋を用意した会社についてテレビがリポートしていた。こういうひと眠りをパワー・ナップというらしい。パワーアップとナップ（仮眠）の造語だとか。短い眠りをとることで、そのあとの生産性が上がるのだという。

いい時代になった。猛烈な眠気に襲われても、勤務中にそんな気配を見せてはいけなかった世代の人間から見ると隔世の感である。今や、職場のうたた寝はサボりではない、充電とみなしてもらえるのだ。うらやましい。

もちろん、前の世代だってねむかった。こっそり寝ることもしばしばだった。

忙しそうにしている記者も例外ではない。外国語の記者会見、数字が次々と出てくるブリーフィング、人に何かを伝えようとする気持がみじんもない役所の発表。昼下がりに、そんな現場に居合わせると、起きているのがつらくなる。うつむいてメモをとるそぶりをしながら、こっくりこっくり。

そればかりではない。一対一の対面取材のときに猛烈な眠気に襲われたと告白した豪傑もいた。

本人はなんとか乗り切ったと言っていたが、おそらく相手にはバレていただろう。焦点の定まらない視線。メモ帳に書き連ねているのは文字には見えないグニャグニャ曲がった線。そんな記者を前にして、話をする人の困惑やむなしさは想像にあまりある。

私は一対一の取材で寝たことはない。けれど、インタビューの最中に相手に居眠りされたことならある。

ジャカルタ勤務時代のことだ。取材相手はイスラム教の指導者。質問を重ねるうちに、答える言葉が次第に途切れがちに。もともと目が細い。考え込んでいるのかなあと、レンズの分厚いめがねの奥をのぞく。まぶたは完全に閉じている。けだるい熱帯の昼下がり。二人だけの応接間に規則的な寝息がかすかに響く。

「うわっ、寝てる！」

どうすればいいのだ。「起きてください」と大声で言うのは露骨すぎる。取材をあきらめてそっと引き揚げたら、相手の寝覚めが悪いだろう。取材相手に寝られた記者はあわれだ。質問がくだらないのでタヌキ寝入りしているのだろうかという不安まで頭をよぎる。

だが、なぜか 20 分くらい経つと、突然目を覚まして、猛烈な勢いでしゃべり始めた。

この人は当時、教徒団体のトップとして、イスラムの近代化や独裁政権下にあった同国の民主化に力を注いでいた尊敬すべき大知識人。その後、インドネシアの大統領にもなった人物である。

あとで、この経験を現地の特派員仲間たちに「実は……」と話したら、被害者は私だけではないことが判明した。イスラム教徒は礼拝のために朝が早い。昼食後あたりが一番眠くなる。大知識人でもねむいときはねむい。忙しい人だけになおさらだ。彼との午後一番のインタビューは避けるべきだった。

あれは「パワー・ナップ」だったのか。

たしかに一眠りですっきりしたせいか、そのあとは明快で説得力のある話が聞けた。

さて、暑くも寒くもないさわやかな季節。安曇野の雑木林に囲まれた拙宅は、昼寝にはうってつけ。木々の間を飛びまわる小鳥たちのさえずりが聞こえるし、そよ風が緑の香りを運んでくる。スピーカーもアロマ・ディフューザーもいらない。都会の会社の仮眠室よりもっとずっと快適。

だからほぼ毎日昼寝している。15 分どころか、1 時間近くうつらうつら。

で、目が覚めると生産性がめざましく向上しているのかというと、そういうわけではない。寝る前もグータラ、寝た後もグータラ。

「パワー・ナップ」なんてほんとうに効果あるの？まあいいか。私の場合、生産性を上げる必要もないし。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

■拙宅の庭先の昼寝コーナー。ここでウトウトするのは至福のひととき（写真提供・説明とも筆者）

［編集後記］
閑人氏連載は 40 回、この季節も早や 4 巡。2021 年 6 月号（第 4 回）は「鏡となった安曇野」でした。同号の後記に大野氏のご紹介を認めました。ＨＰでバックナンバーご覧ください（K）